

# 教 仁 名 聞

第12号  
(発行日)

2011年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○ 〈念仏座談会〉 毎月2日と12日。午後3時始。

○ 〈聖典学習会〉 毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉 毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 自己愛のすがた

真実が明らかでないという  
迷いから、我執我愛が起こり、  
それが本でさまざまな煩惱が  
起こると仏教では説かれてい  
る。我執我愛とはいわゆる自  
己への愛着(自己愛)である。  
私たちが凡夫の心は自己愛が  
実に深く染みついていて、凡  
夫の心を識とも言うが「識は  
常に樂を求む」(大智度論)  
で、いつもさまざまな樂を求  
めている。自己愛は、快適さ  
や娯楽や道楽や安樂を求め  
て、それで心を満足させよう  
としている。

逆に菩薩は「智慧門により  
て自樂を求めず」「自身のた  
めに諸樂を求め」ないのであ  
ると、天親菩薩の『浄土論』  
に説かれている。

夏には快適な涼を求め、冬  
には快い暖房を求める。美味  
しいものが食べたいし、テレ  
ビや映画を楽しみたい。また  
音楽を聴いたり、時には温泉  
や旅行も楽しみたい。その様  
に自分にさまざまな楽しみや

快適さを求めるのは自分の心  
を満足させたいという自分に  
愛着する自己愛が元にあるか  
らであろう。それは裏をかえ  
せば、いつでも「もの足りよ  
う」「もの足りた」と欲求  
している心でもある。

自己愛は、食事の時、箸で  
ご飯を口に入れる行為の中  
も、「私は生きたい」「私は生  
きのびたい」という欲求とし  
て現れている。また電車など  
に乗ると、先ず自分の座る席  
を探そうとする。我が身を樂  
にしたいという自己愛的な欲  
求で席を探している。

あるいは社会の諸問題の解  
決のために、努力しているか  
どうか。社会正義に精進して  
いるかどうか。社会悪に対し  
て行動しているかどうか。そ  
れを自らに問うてみると、安  
逸をむさぼっている我が身が  
痛いほど知らされる。

そして、人生活の中での  
自己愛的な人生で、一体私た

ちは要するに何を求めている  
のであろうか。

それに関して覚如上人の  
『口伝鈔』に「(勝他・名聞  
・利養)このみつのもどりを  
そりすてずは、法師とい  
がたし」と法然聖人がおっし  
やつたと伝えてい

る。出家するときに、髻(もと  
どり)を剃るが、髻を剃るの  
は、法師は勝他・名聞・利養  
の心をそり落すべきものであ  
ると言う意味が示唆されてい  
る。

ということとは逆に世間の人  
は勝他・名聞・利養を血眼に  
なつて求めているものだと  
いふ知見が裏にはある。

この名聞・利養は名利と熟  
語されるから、勝他・名聞・  
利養は勝他と名利となる。

そしてそれに愛欲を加え  
て、愛欲・名利・勝他とい  
う三つにしてみる。そうすると、  
私たちの自己愛は要するに何  
を人生に求めているかとい  
うとこの三つであるといつても  
過言ではなからう。

自己愛は自己を楽しませよ  
うとするが、まずは愛欲、性  
愛である。これは単なる心の  
欲求というだけではなく、肉

体そのものが求めているとい  
つていいほど強いものであ  
る。オスとメスの性の身であ  
るかぎり、私たちの愛欲は無  
くならないのではなからう  
か。だから俗に「人は死なな  
きや仏になれない」などと  
いわれるのである。

次に名利すなわち名譽と  
利養であるが、これは名譽欲  
と財欲のことである。名譽欲  
は自分が、人から高く評価さ  
れたい、人に善く思われたい、  
人から軽蔑されたくない、後  
ろ指を指されたくないとい  
う「おのれのメンツ」に関わる  
自己愛である。着飾って外出  
する中にもあるし、一冊の本  
でも書いて世に知られたいな  
どという願望の中にもある。

次に利養すなわち財物を

## 《 秋季彼岸会 》

9月22日 (木)

午後2時始まり

# 正信偈に学ぶ問答

## (三十二)

求める心で、これは生存欲に直接関わる欲求である。生きたい、生きのびたい、安全に生きたいという欲求はお金や物を求めて止まない。お金が欲しい、しかもいつまでも安定的に欲しい。それはどこまでも自分ないしは自分の家族の生存を確保したためである。私たちが知識を求め、能力を高めたのも生存欲からではなからうか。これも「食べたい」という身体的欲求と離れないから、非常に根の深いものである。体の細胞の一つ一つが生きようとする欲求で動いているといわれ、ウイルスなどの他からの外敵を排除しようとしている。

きるかぎり、他より勝れていたい、という願望である。日常におけるささいな口論にさえ、自分が負けることをいやがっている。地域の人や会社の人たちの集まり、同窓会などの会合に出席すると、自分と他者とを比較して、他者に負けまいとする意識が頭をもたげてくる。

法蔵菩薩は、自己愛に巣くわれていて罪深い私たちを憐れみ、自己愛から解放し大いなる利他愛である仏心に転化せしめようと、本願を起し、浄土を立て、六波羅蜜の修行を私たちのために行われた。そして南無阿弥陀仏となって

「自己愛の深い汝よ、お前の力では自己愛を離れることは出来ない。そんなお前を我が願力で必ず仏にする。助けると喚んで下さっているのである。この南無阿弥陀仏によって、私がいかに自己愛に染められた浅ましい凡夫であるかを知らされるとともに、こんな私であるにもかかわらず、阿弥陀仏の大慈大悲に助けられて、終いには自己愛は利他愛に転じて仏にまでして下さるのである。」

「了」

「自己愛の深い汝よ、お前の力では自己愛を離れることは出来ない。そんなお前を我が願力で必ず仏にする。助けると喚んで下さっているのである。この南無阿弥陀仏によって、私がいかに自己愛に染められた浅ましい凡夫であるかを知らされるとともに、こんな私であるにもかかわらず、阿弥陀仏の大慈大悲に助けられて、終いには自己愛は利他愛に転じて仏にまでして下さるのである。」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

「了」

と、危険です。これらの言葉は仏様の悟りの智慧の眼から仰せ下さる真理ですから、迷える凡夫が勝手な解釈をするとなんでもない結論を出すことになりかねません」

N 「凡夫の勝手な解釈とは」

D 「たとえば、この世の中の戦争とか不当な弾圧とか差別があつても、あるいは私たちの欲とか怒りなどの煩惱の心も、(本来この世は浄土であり人の心は仏の心である。だからこの世も煩惱の心もそのまま肯定されるべきである)などという解釈のことで。これはこの世の邪悪や煩惱の心を無批判にそのまま肯定してしまうことになりかねません」

N 「そうすると、阿弥陀様が満ち満ちておられるということとは、悟られた仏様の智慧の眼での見方であつて、凡夫の私たちが勝手に解釈したりしてはいけないのですね。そうするとどのようにごく受けとればいいのでしょうか」

D 「それは仏様がそこで何を云おうとされているのかを、仏様のお心にそつて考えねばなりません」

N 「しかし、凡夫の私たちが仏様は何を私たちに告げよう

とされているか、どうしたらそれがわかるのですか」

D 「それはまず親鸞聖人などの祖師方のお導きに順つて、阿弥陀仏のお心をいただくことが大事です。それが信心なので。信心の智慧でもつて

仏様のお言葉を受けとる、そうすると間違いが少ないので。真実の信心もなくて、仏の言葉を勝手に解釈すると、我も人もひいては社会もまどわかかねないのです」

N 「真宗だけに限らず、経典の言葉、お聖教の言葉を扱うときは、正しい信心をいただくなり、覺りを開くなりして、その智慧でもつて謙虚に聖典の言葉を受けとることが大事なのですね」

D 「ええ、宗教においてはそれは非常に大事なことです。そこがおろそかになると、悪くすると宗教紛争とか、今度の戦時中のような戦争肯定論になつたり、近くはオーム真理教の事件とか自爆テロなどが起こる原因にもなります」

N 「では私たちに信心の智慧さえあれば、いつでも聖典の言葉が正しく理解できるのでしようか」

D 「確かに信心の智慧は聖典

の言葉を正しく理解する一番重要な因となりましょう。しかし、さまざまな外的な縁に影響されて、聖典の言葉を誤つて理解してしまうこともありえるのです。その危険性を十分に自覚しておかねばなりません。聖人は(親鸞も偏頗あるものとききそうらえば)と仰せになり、私も偏つた見方を免れないと厳しく自己を見ておられます。それに信心の智慧と言つても信心の浅深があります。真実の信心が浅いと外的な縁に左右される度合いが増えるともいえましよう」

N 「そうすると信心をいただくからといつても、そこに安住するのではなくて、一生信心を深めていくことが大事なのですね」

D 「ええそうしないと凡夫の心の眼の曇りは除かれていきません」

N 「外的な縁ということですが、たとえばどういう縁によつて私たちは影響を受けるのですか」

D 「それはその時代の社会状況とか思想状況とか、あるいは個人の性格など、いろいろありましよう」

N 「たとえば」

D 「戦前において、真宗の信心のある学者が今度の戦争に協力的な発言をいろいろしています。これはこの時代の天皇を中心とした国家形成時代の世論や軍国主義教育やまわりの状況からの濃厚な影響(縁)を受けたからともいえましよう。それに高名な真宗学者だからといって信心が深いとは必ずしも言えません。学問や名声と信心とは別ですから」

N 「外的な縁の影響は誰しも受けると思いますが、その中で悪しき外縁からの影響を出るだけ受けずに物事を判断するにはどうしたらいいのでしょうか」

D 「それはさきほど申したように、真実の信心を深めていくことです。どこまでも真実に深く軸足(じくあし)をおいてこそ、外からの悪しき影響(縁)に対抗できるからです。それともう一つは世界や国家や社会的確に分析し判断する学びをしていくことです」

N 「その学びとは具体的には」

D 「時代社会の状況を正確に判断するには豊富な知識や分析力が必要です。それにはさまざまな世間の知識、ことに

広い意味の社会科学の学びが必要でしょう。大乘の菩薩は仏法の学びだけでなく政治学や自然科学など世間の学問を学ぶことが要請されているといわれますが、このためでしょう」

N 「はじめにもどつて、尽十方無碍光如来の(尽十方)というお言葉から聖人は何を仰せになるのでしようか」

D 「何時の時代であろうとどこにいる衆生であろうと、そのものいるところには(さわりなく助けて下さる如来様がまします)とお聞かせいた

だきます。私がどのような人間であろうとも、また世の中がどれほど絶望的な状態になろうとも、そこに救いたもう阿弥陀様がましまして、(助けられるため)と喚びかけておられます。また喚びかけられていない人はひとりもない。そういう人生の根本的なメッセージがこの言葉からお聞かせただけです。それはどんな世の中であつてもだれでも、仏の光にであつて、

そこから希望をもつて新しく生き始めることができるというメッセージでもありましよう」

# 信心夜話

『一蓮院談合録より』(8)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

たのむものを助けんとあるはたのめのことば。たのめたのめと云うて我等に難儀させたまうことばにあらず。唯助けてくださるのじやけれども、たのむばかりのことばがないと行者の方に落ちつかれぬなり。それはなぜ助けてやるとばかりでは如来様の御心に何ぞお好みがあるかもしれぬと云うこの方にあやぶみがある。そこでたのむばかりで助けるとあれば、何も外にお好みがないということを知れる。強いて阿弥陀様のお好みいかんと尋ねれば、外にはないが汝等の方から、後生の世話をやめてくれさえすればよい、それほどが弥陀の好みじゃほかに、少しも世話せでそのままながら助けてやるぞとある御ことをたのむばかりで、何にもいらぬ好みはない、かならず助けてやるぞとなり。

へここという「たのむ」とはおまかせするということであって、私の側から依頼し祈願することではない。しかも、それは私に先だって阿弥陀仏が私たちに「たのむものを助けん」と仰せ下さっている

のである。私が「助けて下さい」とたのむから、阿弥陀仏が助けようとするのではなく、阿弥陀仏がすでに私を助ける

立ち上がった下さっていたのである。それを聞いて「それならお助け下さいませ」とおまかせしているのを弥陀をたのむという)

たのむものを助けんとあるはたのめのことば。たのめたのめと云うて我等に難儀させたまうことばにあらず。唯助けてくださるのじやけれども、たのむばかりのことばがないと行者の方に落ちつかれぬなり。

「たのむものを助ける」との本願の仰せを聞くと、ややもすると「たのんだら助けて下さる。たのまなければ助けて下さらぬ」という風に「弥陀をたのむ」を条件のように受けとってしまう。それゆえ「なかなかたのめません」という嘆きにおちいるのである。たのんだら助けて下さるといふうに受けとると、「阿弥陀仏は難儀なことをおっしゃる」と思い、阿弥陀仏をうらむ気持ちさえ起こる。ところが「たのめ助ける」というのは私たちに難題をふっかけるような仰せではない。たのめというのは、「条件なしに、ただ助ける」というお心である」

それはなぜ助けてやるとばかりでは如来様の御心に何ぞお好みがあるかもしれぬと云うこの方にあやぶみがある。

阿弥陀仏の仰せが「助ける」とだけなら、私たちはなお落ち着かない。なぜなら、あんなつたら助ける、こうなつたら助けるというような、何か如来様の方にえり好みがあるのではなかるうかと、まだ私の方にあやぶみが起こるからである。実際、法を喜ぶ心があつてこそ阿弥陀様は助けて下さるとか、浄土や阿弥陀仏のことがはつきりわかつてこそ助けて下さるとか、疑い心がなければこそ助けて下さる、というように、やはり私の側にこれでこそ助けて下さるといふようになしるしが必要ならぬとつい思ってしまう。実際、「仏法を有難いという思いもないのに、阿弥陀様がへそのまなりで助ける」とおっしゃっても、やはりそうはいくまい」と内心ひそかに思っていて、なんとか喜びたい、これで助けていただけるといふようになしるしや変わり目がほしいと、知らず知らず思ってしまうのである」

そこでたのむばかりで助けるとあれば、何も外にお好みがないということが知れる

「そこで阿弥陀様は「助ける」とばかりおっしゃらずに「たのむばかりで助ける」と仰せになる。それによって、何も私に対する好みも要求もないことが知れる。「たのむばかりで助ける」のお心とは「汝の困っている後生の問題はたのまれてやるからたのめ」であり、「そのまままるまる引き受ける」の仰せである。阿弥陀仏は私にチリほども何かを要求されてはいないのである」

強いて阿弥陀様のお好みいかんと尋ね

れば、外にはないが汝等の方から、後生の世話をやめてくれさえすればよい、それほどが弥陀の好みじゃほかに

「もししいて阿弥陀仏の方で我々に対する願いがあるとすればなら、「お前の方から助かりにかかるのをやめてくれよ」が阿弥陀仏の好み。私の方が、有難くないこととか、信じてこそとか、疑い晴らしてこそとか、分かつてこそとか、私の方も後生の世話をしにかかると、いつまでも自分の姿や心にこだわって、丸助の阿弥陀仏の大悲心を見無視し続けてしまう。私が助かる条件は阿弥陀仏の方ですべて整えて下さった、そのお知らせが南無阿弥陀仏である。「汝の助かる仕事は全面的に弥陀の仕事であるぞ、汝の力はチリばかりもからぬ」と阿弥陀仏は仰せらるのである」

少しも世話せでそのままながら助けてやるぞとある御ことをたのむばかりで、何にもいらぬ好みはない、かならず助けてやるぞとなり。

「少しも汝の世話はいらぬ、そのままなりで助けるぞ」との仰せが南無阿弥陀仏のお心であり、大慈大悲の思し召しである。如来法蔵様の願行成就によって私の往生の世話を全面的に引き受けられたのである。その御恩をそのままにただくことが御恩にかなうことなのである。それなのに、如来様の願行成就のご苦勞だけではまだ足りぬように思い、自分が助かる世話を自分の方で加えようとするのは阿弥陀仏の御恩を軽く見ているのである。自らの力を過信し、阿弥陀仏の御恩を軽んじているのである」